

平成18年
8月号
250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



奉仕に生きる人
伝道を行なう勇者たちに
ラマダーン月と、規律のある人
守られている赤ちゃん

「一ヶ月を通して、食えること、飲むこと、寝ること、起きること、イバーダを行なうこと、服従すること、祈念すること、ズイクルすることといった、人の生の多くの場面に関わってくる規則、定められたことの範疇で行動し、一定の規律を持つ魂に出会い、規律正しく生きることになった人は、ラマダーン月が終わった後も同じ規律、秩序を守り、継続させなければならない。」



イスラーム世界で聖なる月とみなされている連続する3ヶ月のうち、最初の月であるラジャブ月が始まりました。その後にはシャアバーン月、そしてラマダーン月が続きます。一ヶ月にわたって断食し、善行を普段以上に心がけるラマダーン月には何かしら精神的な清まりを体感するものですが、ラジャブ月に神聖な雰囲気を感じるといった経験は個人的には残念ながら一度もありません。しかしこの3ヶ月間には創造主の慈悲が最大限に現れるといえます。心身ともラマダーン月に向けた準備に入るこの時期、創造主により強く思いを馳せ自らを願みることによって慈悲の恩恵にあずかることができるのではないかと思います。

最近のことですが、人間の生き方や思考様式がその人の生きる時代と場所に色濃く影響を受けており誰もが例外ではないにも関わらず、自分自身はその事実をほとんど意識しないまま生活していることに気付かされる場面が度々ありました。その時代に受け入れられているやり方に倣うのが当然とする考え方もできますが、時代を超えた普遍的な生き方、人間をして真の人間たらしめる特性も追求してこそ調和のある満ち足りた人生を送ることにつながっていくのではないでしょう。

私たちはつい、多少の問題こそあれ現代のやり方が最も発展しており進歩的だと考えがちですが、実際は現代も、大きな歴史の流れの中である特徴や方向性を備えた時代のひとつにすぎません。自分自身を振り返るとき、自らが属する社会や時代の特性をまず知り、さらに時代や場所を越えた人々の高深さ、強さ、過ちなど様々な側面を同じ人間がなした事柄として学ぶことが己をよりよく知るのに役立つのではないかと思います。ラマダーン月を控えた今、謙虚に自分自身を見直すよう努めていきたいものです。



編集部より	2
奉仕に生きる人	3
伝道を行なう勇者たちに	3
祈りのある毎日へ	5
マドレーヌ	5
シドゥク（正直さ・誠実さ）	6
預言者ムハンマドが教えた予防医学	9
ラマダーンの導き	11
年離れた人々へのメッセージ	12
守られている赤ちゃん	15
一滴の酒	19
『顔のない天使』 The Man Without a Face	21
なんとなろう	23
ラマダーン月と、規律のある人	24
理由を説明する	27





奉仕に生きる人

教えのための奉仕に生きる人は、心から大切にしているその宣教活動のため、どんなことでも乗り越えて進むことを心に定め、決意している。目標に到達することができた時には、全てを持ち主に与えることができるほど円熟していて、崇高な創造主に対し礼儀正しく、敬意を抱いている。教えのための活動における声、呼吸はそれぞれがズィクルとタスピーフである。それぞれの人を尊く、愛すべき存在と知り、その成功に拍手を送るべき人たちをも神格化することなく、アッラーの意志を信じ、バランス感覚を持つ。行なわれるべき仕事があれば、誰よりも前に自らを、それに対して責任があり、任務を負っていると見なす。それを行なう際に助けとなる人たち皆に対し、敬意を抱き、慈しみの情を持つ。活動がだめになったり、計画が破綻したり、協力体制が崩れ、力が損なわれた時にはとても強い信仰を持ち、希望を失わない。新たに翼を得て、はるかに高いところをはばたいている時には謙虚で寛容である。その道が険しく、上り坂があることをはじめから承知するほどに理性的であり、洞察力がある。彼の道を妨げるものが地獄の穴であったとしてもそれを越えられると信じ、努力する。その活動を深く愛し、命も、愛するものも、全てを捧げることができるほど誠実であり、それらを一度も思い出すことがないほど、報酬を求めず、見返りを求めない態度でいなければならない。

伝道を行なう勇者たちに

聖預言者(彼の上に祝福と平安あれ)は、生涯をとおしてただ一度、巡礼を行なわれた。しかしその生涯は全て、教えを伝え、道を示すことに費やされたのだ。

アッラーが下さった恵みにふさわしい仕事を行なわない人たちは、その泉の水を干してしまう。

時として涙は、多くの人々の心を引き寄せる要因になりえる。

偉大さとは、偉大な業績や偉大な計画によるものではない。人が神のご満悦を目標とすること、アッラーが「私はあなたに満足している。」とおっしゃられることによるべきである。

信仰する人には、その信仰を行動の基盤に置くことが必要条件となる。信仰と実践が人の感情を抑えるようになると、その態度をも方向付けるようになる。

犯した罪がその人自身を不快にするのであれば、その人は、罪と善行を区別することができる、ということである。

成功の敵は豊かさやぜいたくである。ムスリムにとっての成功は、特殊部隊のように質素に生きることによるのみ可能である。

卵やヒナがたくさんあるならば、決してそれら全てを同じかごに入れてはいけない。

用心深いことは、運命を変えることはないかもしれないが、それでも、結果として人が運命のせいにすることから、その人を救う。

いい人だと見なすことと、いい人だと見なして信頼することは別である。これらを区別することは、確かな見る目を持っている人の役割である。

教えを伝える際に大切なことは、そこで語られることがイフラス(信仰上の献身的態度・純粋な信仰心、敬虔さに基づくムスリムの内面的美德の一つで、外面的には神の唯一性をかたく信じる強固な姿勢。)と結びつき、受け入れられることである。自分より上の立場にいる人に、教えを伝えようとするべきではない。否定的な反応が返ってくる可能性がある。息子が父に、生徒が師に、弟子が親方に向かってものを言うべきではない。アブー・ターリブが聖預言者(彼の上に祝福と平安あれ)を受け入れなかったという事実は、留意するに値するものである。

母親、父親は、決して何かの犠牲にするべきではない。ただし彼らが「イスラームのために奉仕をしてはいけない。」と言っているなら、その禁止事項について彼らにしたがうことはない。これ以外のことにおいては、両親に従順である者は恵みを見出す。

信者は、地上において安心と信頼を象徴する存在である。

人は、自分が正しかったとしても父親と論争するべきではない。怒る、という特質は誰にでも大なり小なりあるものである。激しく腹を立てることは認められることではない。もし、聖預言者(彼の上に祝福と平安あれ)の道において鍛錬すれば、敵に対しては威厳を保ち、見方に対しては謙虚でいることができる。

イスラームと敵対している、あるいはイスラームを攻撃する書物を、絶対に読まなければいけない状況にあるのであれば、少なくとも注意深く読まなければならない。

悪で凝り固まったような人たちに対して、人間らしく振舞うことでその災いを防ぐこともできる。『人は善い行いのしもべとなる』という言葉は、心に留めて置かれるべきである。

取るに足りないような人々は、その周囲に、人柄のよくない、取るに足りない人々を集めている。それによって自分をちょっとでも大きく見せられると思っているのだ。

シャイターンはしばしば、道を伝えることを人生の軸としていない人々を、道に迷わせる。善いことを命じ、悪いことを禁じていない人々は、啓示による恵みを受けることができない。このような人々には、神からもたらされるひらめきなどは絶対に生じない。本を書くことはできても、書くものは実りがなく、効果も少ない。善いことを命じ、悪いことを禁じる人々は、いつでも神によるひらめきを感じる。だから私たちは学び、考え、皆に伝えるべく努力しよう。魂を鑑みても生き生きしていることができるように。

こんにち、道を示そうとする人々の思いは、ひとえにアッラーのご満悦を得ることになければいけない。現世的な感情や思いが、その人の目標になってしまっはいけない。道を伝えようとする人は、次のような考えでいるべきである。「シャイターンがいつか、私の道を地獄へと導いたとしても、そこでも私は神と真実を説かなければならない。」この時代、私たちが必要としている理想的な布教者の気持ちのあり方とは、このようなものである。*

* この文章は“Pearls of Wisdom”よりの訳です。



アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

自らみち生いる者よ

永遠なる者よ、慈悲深き者よ

統治者よ、全知者よ

罪、害から守る者よ

公正さと英知で糧を分配する者よ

平安なるお方よ

英知で、魂、糧、恵みを減らす者よ

英知で魂、糧、可能性を豊かに与える者よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。

私達を地獄の炎からお助け下さい。*



マドレーヌ

材料：薄力粉 100g ベーキングパウダー 3g(小さじ1) 砂糖 100g
卵 2ヶ 無塩バター 100g レモンの皮 1/2～1個分

- 作り方：1.ボールに卵を入れて溶きほぐし、砂糖を加えて泡立て器でマヨネーズ状になるまで混ぜる。
- 2.1へレモンの皮のすりおろしと粉も加えて混ぜる。
- 3.温かい溶かしバターを1度に加えて、泡立て器で均一になるまで混ぜる。できあがった生地を冷蔵庫に1時間程入れる。
- 4.型に7分目まで入れて、170℃のオーブンで15分焼く。型からはずして、網の上でさます。

*偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願(きがん)、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鏡が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



シドゥク(正直さ・誠実さ)*

シドゥクは真の思考、言葉、行動を意味しますが、アッラーへの道の旅人の人生には次のように反映します。嘘をつかないこと、正直に生きること、アッラーへの忠誠を体現した信頼できる人であるように努力すること。言い換えると、すべての思考、言葉、行動において、また『(言行の)誠実な者と一緒にいなさい。(聖クルアーン 9:119)』というクルアーンの指示に従うことにおいて正直さを失わないこと、そして常に個人的レベルにおいても社会的レベルにおいても正直さを捜し求めることです。このような人々は正直であるということにとっても注意深くあり、間違った証拠を出したり、冗談でも嘘を言うことはありません。ハディースでも、「その程度にまで正直な人々は、最後の審判で正直者と記されるが、思考や言葉、行為が矛盾していて、他人を欺く人々は、嘘つきと記される」と述べられています。

シドゥクはアッラーへと続く道の中で最も堅固なものであり、シドゥクを持つ人々は幸運な旅人たちです。シドゥクは行動の精神や本質であり、思考における真^{ほんご}っ直ぐさの真の基準といえます。これによって信仰する者と偽信者とは分けられ、楽園の人々と地獄の人々とも分けられるのです。シドゥクは、一般の人々が持つことの出来る預言者の美德であり、それによって「しもべ」が「王」と同じ祝福を分かち合うことができるのです。クルアーンの中でアッラーは真実であることを、真実を伝える人と、真実を確認する人という両方として描写しています。『真理を齎^{もたら}す者、またそれを確認(して支持)する者、これらは正義を行う者である。(集団章 39:33)』

シドゥクは、嘘をつくことによって抜け出せるような緊迫した状況下でも、自分の高潔さを守り、偽善と嘘を避けるための努力だと定義付けることもできます。ジュナイド・アル=バグダーディは次のように述べています。「誠実で正直な者は(自分の高潔さを守るために)少なくとも一日に四十回は状態を変えるが、偽善者は(本来あるべき道から逸れていても)心配や不安を感じずに四十年間同じ状態でいられる。」

シドゥクの初期段階で最も程度の低いものは誠実さであり、人がいるところでも独りのときにも同じように振る舞うことです。これに、思考や感情、行動、意図において正直であることが続きます。シドゥクを持つ人々は感情、思考、行動が互いに矛盾しない勇敢な人々であり、最も強いシドゥクを持つ人々は、想像、意図、感情、思考、行為、仕草の全てにおいて完全に正直な人々でしょう。

行動におけるシドゥクや、高尚な理想や目標に対する執着、それに対する誠意や確信などを達成するために自分の能力や才能を使うことは、預言者の特性の一つです。クルアーンの中でも、このシドゥクの最も高いレベルについて述べられています。『またこの啓典の中で、イブラーヒーム(の物語)を述べよ。本当にかれは正直者であり預言者であった。(19:41)』シドゥクはすべての預言者たちの最も重要な特性であり、イスラームとクルアーンのために尽くすための最も強い原動力となったものです。これはまた、信仰する者にとって、来世で最も大切な評価であり、最も効力の

* この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

ある証拠となると言えるでしょう。アッラーはこの重要な点について私たちに注意を喚起されています。『これはかれら正直者が、正直ゆえに得をする日である。(5:119)』

預言者たちやアッラーに近づくことのできた清らかで素晴らしい信仰の深い人々にとって、シドゥクは稲妻よりも早く彼等を最も高いところまで運ぶ、天国の乗り物として働きます。一方、嘘はシャイターンとその仲間たちを最も低い場所まで連れて行ってしまいます。思考はシドゥクという羽で「舞い上がり」、価値を増し、行動は正直さという地面で繁茂し、誠意ある祈願と礼拝は慈悲深きアッラーに届き、歓迎されるのです。

シドゥクは最も偉大なアッラーの美名の「錬金業」としても効果的です。バヤジッド・アル＝ビスタミは、最も偉大なアッラーの美名について尋ねられたとき、次のように答えました。

「アッラーの美名のうちで最も取るに足らないものを教えて下さい。そうしたら、私も最も偉大なものを教えられるかもしれません。もし最も偉大な美名ほどに(礼拝や行動がアッラーに受け入れられるために)効果的なものがあったら、それはシドゥクでしょう。どの美名でもシドゥクをもって呼ばれたら、それが最も偉大な美名になるのです。」

シドゥクは悔恨の光で預言者アダム(彼の上に平安あれ)の額を照らしました。シドゥクは世界中が洪水になったとき預言者ノア(彼の上に平安あれ)の救済の舟となりました。シドゥクは預言者アブラハム(彼の上に平安あれ)が火の中に投げ込まれた時に彼に安全と冷却をもたらしました。シドゥクは普通の人々を特別な高さにまで持ち上げ、目に見える存在を越えたところにある王国と現実のドアを開ける鍵となるのです。シドゥクによって高く持ち上げられた人にとっては、さらに上ることは容易であり、この鍵を使う人の前でドアが閉まることはありません。このことについてのルーミーの言葉は何と適切なものでしょう。

愛する者のシドゥクは命なきものにまで影響する。

とすれば、それが人の心に影響するとして何の不思議があらうか。

モーゼのシドゥクは彼の杖と山に影響した。

いや、それは大いなる海にまで影響したのである。

ムハンマドのシドゥクについて言えば、それは

月の美しい表面と輝いている太陽にまで影響した。

多くのクルアーンの章句の中で、本当に信仰する者であることは、言葉や行動、感情、奥深い感覚における高潔さとシドゥクに依っているということ、このような高潔さとシドゥクが現世と来世の両方における幸福の基礎だということが述べられています。例を挙げましょう。

* (折って) 言え、「主よ、わたしを正しい入り方で入らせ、また正しい出方で出させ、あなたの御許から、助けとなる権威をわたしに授けて下さい。(17:80)

*わたしを後々の世まで真実を伝えた者として下さい。(26:84)

*信仰する者には、主の御許で優れた足場を与えられるとの、吉報を伝えなさい。(10:2)

*本当に主を畏れる者は、園と川のある、全能の王者の御許の、真理の座に(住むのである)。(54:54-55)

正しく入ること、正しく出ること、シドゥクの人だと記憶されること、シドゥクでしっかりとした足場、シドゥクの座などは、現世から来世へと延びる長い道のりの停留所であり糧なのです。現世での出来事は来世で実をつけるため、シドゥクを持つ人々は真実を追求し、アッラーの道において課題を始めたり他の場所へ移ったりするときにも、シドゥクを保ち、シドゥクに必要なように行動や生活をし、シドゥクを次世代へと伝えます。彼らの目標は来世における永遠の幸福に値するようになることだからです。

意図や目的においてシドゥクであるためには、信仰する者は思考や決断、行為において意識的にシドゥクであろうとしなければなりません。これが第一のステップです。決心した者は、結果がどうであれシドゥクを貫き、決心を揺らがすようなものからは遠ざからなければなりません。第二ステップは真実を支え、アッラーに認められアッラーのご満悦を得るためだけに現世の生活を保つことです。このような人々は常に自分の欠点や落度を分かっている、現世の魅力に負けることも現世的理由のために自分を曲げることもありません。第三ステップは自分の良心の中でシドゥクを堅く確立して、それが人生のすべての側面をコントロールするようにすることです。これはハディースで次のように説明された状態のことです。「アッラーが主であることに、イスラームが宗教であることに、ムハンマドが預言者であることに満足する者は、信仰の歓喜を味わった。」

最大のシドゥクと誠実さは、アッラーの采配^{まきはいい}がどうであってもアッラーの統治に満足し、イスラームを自分の人生をコントロールするアッラーの与えられたシステムとして受け入れ、預言者ムハンマド(彼の上に平安と祝福あれ)の誘導や指導に進んで服従することでしょう。本当の人間であることは、この重大な責任を引受けることにあり、それを完璧に実行するのはとても難しいことなのです。

それでは、これを素晴らしい詩で終わらせることにしましょう。

たとえ脅迫されていたとしても、人間に相応しいものはシドゥクである。

全能のアッラーはシドゥクを持つ者を助ける御方である。





預言者ムハンマドが教えた予防医学*

7. まつ毛に塗る墨

ここでまた別のハディースに移りたい。預言者ムハンマドは語られている。「目をまつ毛に塗る墨によって治療しなさい。それはあなた方の目を開き、まつ毛を育てる」[†]

我々の、教養高い医者たちは、目とまつ毛のために最も有効なのは預言者ムハンマドが勧められているこの方法であることを指摘している。我々も、化粧品の世界でこれからはまつ毛に塗る墨の時代がやってくることを予想している。

皮膚を守る、抗生物質としてもハディースに出てくる、まつ毛に塗る墨と同様の効果を持つもう一つの物質が、ヘンナである[‡]。ヘンナの殺菌力は、今日使われているテントウルディオットやメロフィシロンといった物質を上回るものであることは、科学的な現実なのである。

8. クロタネソウの種

ブハーリーと、アブー・フライラによっても伝承されているあるハディースで、預言者ムハンマドはこのように述べておられる。「クロタネソウの種は、死以外の全ての苦しみに有効である」[§]

クロタネソウの種は、分析の対象にされ、真剣な研究がされたなら、どれほどの病気に効果があることが立証されることであろうか。

このハディースでは特に二つの点が注意を引く。第一に、クロタネソウの種が健康によいという点、第二に、それでさえも死への解決にはなり得ないという点である。

我々はここでも、この問題の科学的な面をその分野の専門家に譲り、いくつかのことについてのみ、触れるにとどまりたい。

病気において、特に回復期において、たんぱく質が重要となる。同時に、熱量とビタミンが豊富であり、消化のいいものが必要となる。医者が勧めるのもこのようなものであると思う。病人が食べるものは、たんぱく質が豊富で、熱量やビタミンにも富んでいて、しかも消化のよいものでなければならない。病人が

* この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life・1”よりの訳です。

† Abu Dawud, Tib 14; Tirmidhi Tib 9

‡ Ibn Maja, Tib 29; Tirmidhi Tib 13

§ Bukhari, Tib 7; Muslim, Salam 88

失われた力を食事によって取り戻そうとする時に、その消化に力を使ってしまわないためである。

これらの全てをクロタネソウの種が満たしていることは、科学的にも証明されている。つまり、預言者ムハンマドは決して知りもしないことを語っておられるのではないのである。語られたことは全て実現し、それがもたらすものは常に、預言者ムハンマドを評価しているのである。

9. ハエ

ブハーリーの伝えるハディースに沿って、もう少し続けよう。預言者ムハンマドは次のようにおっしゃられた。「あなた方の食器にハエが落ちた時は、ハエの両側を一度中につけて、それから取り出して捨てなさい。なぜなら、ハエの羽の片方には病気が、もう片方には健康があるのである」^{*}

まず、ハエが殺菌を運ぶということは、当時の人たちに知られている事実ではなかった。ハエは、水の中に落ちた時、片方の羽だけでも水の外に出そうとする。そこから抜け出た後で、飛ぶのに困らないためである。そうしてハエはまた飛んで行ってしまうが、食器の中の食べ物には細菌が残され、我々を病気にすることになる。

このような場合には次のことが勧められる。ハエの全体を食器の中につけて、それから出して捨てるのである。なぜなら彼の羽の片方には細菌が、もう片方にはそれに対する解毒剤が存在するのである。ハエが生きたか死ぬかの時、その背中を押さえつけることによって、蓄積している解毒剤の袋が破れ、結果としてハエは片方の羽による雑菌汚染を自分で消毒することになる。

このことについて研究した科学者は次のように語っている。「ハエの背中を抑えた時、顕微鏡で見ると、微生物が動いているのが見える。その後の研究で、これらは、殺菌する働きを持つものであることがわかった」



^{*} Bukhari, Bad'u l-Khalq 17, Bukhari, Tib 58; Abu Dawud, At'imah 48



ムスリムになる前のこと。ある年、思いつきでラマダーン月の断食をしてみることにしました。

思いつきですからかなり適当です。気が向くときだけ日中は飲食を絶ってみました。トータルで一ヶ月の半分ぐらいは断食したでしょうか。週末はムスリムの友人宅で、日没後に断食を解いていただく食事「イフタル」におよばれたりして楽しい雰囲気味わわせてもらいました。アラビア語を少しかじっていたせいもあってクルアーンを読んできたくまりました。アラビア語の「音」が好きなのです。最後の方の短いスーラ（章）を集中して練習しいくつか暗記しました。モスクに行ってムスリムの友人の隣でタラウィーフの礼拝に参加させてもらったりもしました。装いも言葉も顔つきも様々な、世界中からのムスリムたちが毎晩大勢やってきて一緒に礼拝を捧げる様子にワクワクさせられました。

そんな、思いつきで楽しく過ごしたラマダーンも最後の方になると、言葉では言い表せないなんとも神聖な雰囲気が心に宿るようになっていました。あらゆる雑音を避けてその神聖さに浸りたい、というような気分です。

そして迎えたイード・ル・フィットル。ラマダーンの総仕上げといった趣でこれも友人に同行して早朝の礼拝に参加させてもらうことにしました。すると、モスクの中に座って何とはなしに説教を聞いているうちに、なぜか涙が溢れて止まらなくなったのです。何かと自分自身に驚くほどで、なぜだろう、なぜだろうと自問し続けました。その時、心の奥深く、何かを欲しているような声が微かに聞こえてくるような気がしましたが自信が持てませんでした。「私はムスリムになりたいのだろうか。」

それまで何年間か、イスラームの価値観に共感し、人生を支える柱として拠り所にしようという気持ちも持ちつつ、それでも日本でムスリムとして生きることにはためらいを感じて入信までは必要ないと思いつけていた私に、突然聞こえてきたこのか細い声。戸惑わずにはいられませんでした。しかし、教えを頭で理解するだけではなく礼拝や断食などの実践も行ってこそイスラームの理解が進み、新しい世界が開けてくるのではないかという確信も同時に浮かび上がってきたのです。決心し、モスクのイマームやその場にいたムスリムたちに立ち会ってもらい、信仰告白を行いました。そしてムスリムとなりました。

イスラームと出会って約10年、ムスリムとなってからも6年以上が経ちます。入信前は自分自身が当事者でない気楽さから「イスラームって面白い、楽しい」と感じるが多かったのが、いつの間にか「困難」と感じるが増えてきました。それは己の自我との戦いであったり、年月ばかりが過ぎて自分自身の中身が伴わないことに対する苛立ちであったり、色々です。しかしあの入信直前のラマダーンは、何気ない思いつき、楽しい雰囲気、そして決断の時とあらゆるチャンスを受けてくださったアッラーの慈悲と導きを思い返させ、アッラーに立ち戻る必要性を思い起こさせてくれるものなのです。それゆえ、毎年ラマダーン月が始まる前には期待が高まります。今年こそアッラーの慈悲をたくさん感じられるラマダーンとなりますように！

年老いた人々へのメッセージ

五番目の望み

初老に差しかかった頃、私は俗世から離れたいと言う望みを抱いてイスタンブール海峡のユーシャ一の丘で独り魂の休息を捜し求めた。

ある日その丘の上から地平線やあたりを見渡した。たいへん物悲しく、崩れゆく哀れな光景と別離は老いへの警告と思えてきた。私の寿命の木、その45年目の45番目の枝の高さから今までの私の人生、つまり、木の下の方を眺めた。

すると、それぞれの枝に、それぞれの年の期限が定められており、その中には私のいとしき者達、友好関係にあったもの達、知りあった者達の数限り無い遺体があるのに気がついた。その別れと別れから齎される哀愁と精神的悲しみの中で、フズリーバグダーディーのように、離別する親友達を思い、泣き叫びながら、いとしき御方にお会いすることとを思いながら、私は涙する。この空っぽの肉体がまだ息をしているのに気づき、私はよりなきさけぶ。と言いながら、私は癒し、光、希望を捜し求めた。と、突然、来世へのイーマーンの光が私の救助に駆けつけた。それは消える事のない光、絶たれる事のない希望を与えた。

さて、私のようにご老齢の兄弟達、ご婦人達よ、来世がある、来世は永遠であるから、この世も美しい。私達を創造された御方は英知ある御方でもあり、慈悲深き御方でもあるのだから、老いに対して不平を述べたり、悲しんだりすべきではない。

逆に、老いは信仰と崇拜行為によって円熟する。確かな伝承によると、人間の中で最も高貴な人格を備えた124000人もの預言者達が、一部は証言により、一部は経験知により、全員一致して、(そこへ)人間が送られ、宇宙の創造者の確実な約束により齎されるという来世の存在を明確に知らせた。同様に、彼らの与えた報せを解明と立証に基づき、知識に基づく知から確認した12400万人もの聖者(神の友)達が来世の存在を証言した。

英知あるこの宇宙の美の創造者のすべての御名がこの世を照射した。そして、この永遠の世界の明確なる必要性によって、ふたたび、来世の存在を証明する事となる。毎年春になると地上で枯れ果ててしまった木々がふたたび神の「有れ」(ヤースィン章36:82節)の命により、蘇生し、死後の復活を顕現する。そして、ふたたび集められ、繁殖する何十万もの例が見られる植物群や動物界では3000万種もが集められ、繁殖することから、無限のはじめなき終わりもなき神の御力と神の永遠の英知と糧を必要と

する生き物すべてに示される完全なる愛情により、はかりしれない感嘆すべき方法で、万物を育み、毎春、短期間に、数限り無い飾り付けをし、美を示される神の無限のめぐみと絶え間のないめぐみは明らかに来世の存在を必要とする。そして、このすばらしいの果物と万物の創造者の最も愛する芸術作品と宇宙に存在するものと最も深いかかわりを持つ人間に秘められた、深く、揺るがなく、絶え間ない永遠への愛と永遠への望みと永遠への行為は、明らかな印と指示によって、このつかの間の世界の後に永遠の世界、来世、幸福の国が存在する事を鋭く証明している。

そのため、現世の存在とおなじように、明らかに来世の存在も承認することを要する。英知あるクルアーンが私達に御与えになった最も重要な教えとは来世へのイーマーン(来世を信じる事)である。その信仰は大変強力であり、その中に限り無い希望、慰安が存在する、一万人分もの老いが、1人の人間を襲っても、この信仰から来る安らぎはそれをうわまわる。

さよう、私達老人はアルハムドゥリッラーヒ アラーカマーリルイーマーン (完璧なる信仰のめぐみに対しアッラーに感謝し、讃えます) と唱えながら、「老い」を愛すべきである。

第6の希望

私はある時悲惨な軟禁生活を送り、人々から遠ざかった生活を強いられたバルラ高原の、松山の丘で独り日々を送っていた。孤独の中で私は光を捜し求めた。ある晩その高い丘の頂上にある松ノ木の上に作られた天井のない小さな小屋にいた。3、4の異郷の念が重なり合って私に老いを気がつかせた。第六の手紙でも申し上げたように、その夜は光なく孤独で木々のつぶやきと、風にゆれる葉の物悲しいささやきのみが聞こえ、私への哀れさ、私への老いと私の異郷での寂しさをより感じさせた。老いが私に警告した。昼がこの暗い墓に変わり、地球は黒いケフェ(死ぬ時に纏う布)を身につけた。同様に、あなたの人生の昼を夜に変え、地球での昼を墓の中での夜に変え、寿命(一生)の夏も死後の冬の夜にかわるだろうことを私の心の耳に(老いは)語った。私の自我が必要に迫られこう告げた。

さよう、私の人々から離れ孤独である。しかしながら、この50年間の私の人生にとって、逝ってしまった私の愛しい者達と別れ、その背後から、彼らのために泣きながら生き長らえていることは、実際に異郷の地に住むことよりも、さらに深くつらい悲しい異郷での孤独に近づかせる。一瞬にして、すべての世界から別れが近づいていることを、老いが私に知らせてくれる。私はこの孤独を孤独の中で、この悲しみを悲しみの中で得られる希望と光を捜し求めた。

突然、アッラーへのイーマーン(信仰)が救助に駆けつけた。何ともすばらしい親しさ(近づき)があたえられただろう、私の感じた二倍もの恐れが、また千度襲いかかってきたとしても。まだなおその癒しは十分に足りるほどであった。

さあ、ご老人達、ご老婦達よ慈悲深き私達の創造者が存在するのであるから、私達にとって異郷の寂しさは起こりうるはずもない。彼がいらっしゃるのだから、私達にはすべてが有る。彼が存在するので

私達も存在しうる。そうであるなら、この世は空(無)ではない。連なる山々も荒涼とした大砂漠も偉大な主を讃え、主に従い満たされている。意識、知性のある、しもべ達のほかにも彼の光により、彼の取り計らいによって石や木さえもそれぞれ親しい友としての値打ちを持つ。それぞれの状態で、私達と話す事もできるし、私達を楽しませてくれる。

さよう、この宇宙に存在するすべてのものに思いを馳せ、世界というこの大きな書物の文字の数を数え、その存在を証言する者達と、また、魂を持つ者達への、いつくしみ、慈悲、保護の原因となる道具、糧、恩恵の数々を鑑み、そのめぐみを示す証拠や証人達は、私達に慈悲深く、寛容で、友である、愛を御与えになる私達の創造者、美造者、守護者のデルギャーフを指し示す。その法廷で、最もよく受け入れられる執り成すものとは弱さと無力さである。そして、弱さと無力さの時代とはまさに老年期である。このように神の法廷で承認される仲裁者である老いを私達は拒むのではなく愛すべきである。





人間が細菌やバクテリアにさらされない唯一の場所は母親の子宮であるということをご存知でしょうか？そうです、この世界に生まれた瞬間から人間は何百万もの細菌にさらされます。この世で生き残るために、か弱い赤ちゃんはどのような防御システムを備えているのでしょうか？

新生児に必要な栄養は致命的な外敵から保護することに加え、成長を促し、普通食に敏感な消化器官や腎臓に負担のかからないものでなければなりません。もし親がこれらの条件をすべて満たした乳児食を作るとしたらどうでしょうか？赤ちゃんの栄養に関する研究はこれまで何百万ドルものお金をかけて行われましたが母乳に優るものは一つもありませんでした。

新生児のための栄養は、水、タンパク質、アミノ酸、炭水化物、脂肪、脂肪酸、ミネラルとビタミン（AとB群、C、D、EとK）を特定の割合で含んでいなければなりません。

体の大部分は液体から成ります。そのため水は人体に最も必要です。新生児の体の79%は液体ですが、妊娠10週目の胎児の体は94%が液体です。赤ちゃんが3ヵ月になると70%になり、1歳では60%、大人になると液体の量は総体重のおよそ55%になります。毎日大人の体を通ずる液体の量は体重のおよそ6%ですが、赤ちゃんの体を通ずる液体の量はその四倍の25%です。ですから赤ちゃんは脱水症状を起こしやすいといえます。このことからわかるように、赤ちゃんに必要な栄養は水を多く含んでいなければなりません。



（アッラーの泉から湧き出る）母乳の90%は水からなっています。母乳は体の成長と修復に不可欠な固体（カゼイン）と可溶性（乳漿にゆうしょう）タンパク質を含みます。母乳中のカゼインは牛乳のカゼインと比較すると消化しやすく、乳漿は赤ちゃんを感染症から保護する重要な役割を果たします。例えば牛乳には、人間の赤ちゃんにとって不可欠である抗感染性タンパク質は含まれていません。赤ちゃんの免疫系は完全には発達していないので感染症を退けることができません。母乳は栄養を提供するだけでなく、赤ちゃんを感染症から保護する「生きた」液体であり、有効な大食細胞とリンパ球を含んでいる母乳によって代わる乳児食はありません。（WHO-1993、ユニセフ、1993 - 栄養 H-10F）

クラーンの物語(アル・カサス)章には、ファラオの想像を絶する虐待とアッラーによる彼への戒めについて書かれています。ファラオは、占い師から赤ちゃん（イスマイルの息子の後継者）が生まれて、彼の王国を終わりに至らせると告げられました。これにおびえたファラオは国の全ての新生児を殺すよう命じました。その時ムーサーの母は妊娠していました。彼女はムーサーを生みましたが、唯一の心配は彼をファラオの兵士から守ることでした。そしてアッラーから次のように導きがありました。


「かれに乳を飲ませなさい。かれの（身の）上に危険を感じた時は、かれを川に投げ込み、恐れた

り悲しんではならない。われは必ずかれをあなたに返し、使徒の一人とするであろう。」

「かれに乳を飲ませなさい」とは自分の赤ちゃんの命を救うことだけを考えていた一人の母へのアッラーからの言葉でした。この節の前後をよく読むと、この節の意味がどうやって赤ちゃんを守るかという事は明白です。ではなぜ赤ちゃんを守るために授乳しなさいとの節が下されたのでしょうか？それはファラオの兵士達が赤ちゃんの敵であっただけでなく、のちの研究によって判明したバクテリアや細菌も一番の脅威であったからです。ムーサーの話のそれはファラオより差し迫った脅威でした。ファラオの兵士が彼を見つける前に、赤ちゃんがバクテリアやウイルスにさらされることは確かでした。極度の不安の中では母親は自分の子供を清潔にしたり、きちんと授乳することをおろそかにしかねません。それが原因で感染の危険性が増すこともあります。アッラーはムーサーの母に何よりもまず母乳を与えるように命令しました。それはアッラーが母乳をつくり母の体を通してそれを提供するお方であり、母乳の役目が栄養を提供するだけでなく免疫をつけることもご存知だったからです。もちろんアッラーはムーサーを直接保護することもできたかも知れませんが、原因と結果の世界に住んでいる私たちに宇宙の完全なるバランスを思い出させてくださいました。

授乳中の母親に不安やストレスがあると母乳の量に悪い影響を及ぼします。(WHO-1993、ユニセフ、1993 - 栄養 H-IOF) クルアーンでは、ムーサーの母親に授乳することを勧めた後に「。。恐れたり悲しんではならない。われは必ずかれをあなたに返し、使徒の一人とするであろう。」と母を慰め続けました。授乳中の母親の体内では高いレベルのプロラクチンが分泌されています。このホルモンは母乳生産を刺激すると同様に、抗うつ薬として機能します。これを考慮すると、上の文脈においてムーサーの母が授乳するように勧められたのは非常に重要な意味をもちます。

約 1400 年も前に啓示された節ですが、30 年間の母乳の研究の結果に矛盾していないのは素晴らしいことです。



ラクトースは赤ちゃんの消化器系にふさわしい炭水化物の 1 種です。ラクトースは赤ちゃんの体内で糖のレベルのバランスをとりながらゆっくりと消化されます。ラクトースにはカルシウムの吸収を増やす機能もあります。ラクトース中にある脂肪分子とガラクトースの合成物は乳児の脳の発展にとって不可欠で、乳児の腸にあるラクトバシリアス・ビフィダスと呼ばれるバクテリアの増加にも役立っています。これらの無害なバクテリアは腸内細菌叢をつくり赤ちゃんを下痢から保護します。未熟児においては母乳中の 90% 以上のラクトースが腸で粘液を分泌する血に送られます。この予防治療は赤ちゃん自身ができる訳ではありません。ラクトースのもう一つのいい点は、母乳中のラクトースの量は母親が食べるものに関係なく一定に保たれていることです。

母乳には、オリゴ糖などで知られる 100 種類以上の糖分が含まれています。腸のオリゴ糖類と他の

抗感染性要素は、有害な微生物が赤ちゃんの腸にへばりつくのを防ぎます。

赤ちゃんは母乳に含まれる脂肪から必要とする大部分のエネルギーを得ることができ、腸に簡単に吸収されます。母乳の脂肪の比率は授乳の終わり頃になると徐々に増加します。これは赤ちゃんに満腹感を与えて食べすぎるのを妨ぎます。このように、赤ちゃんは心臓病、高血圧、糖尿病、その他将来起こるかもしれない肥満などの健康リスクからも保護されています。

母親の食べ物は母乳中のミネラルの量や質には影響しません。母乳は体に蓄えているミネラルの中から赤ちゃんが必要とするミネラルの量だけ与えます。また母乳は赤ちゃんが生まれて最初の月に必要とするすべてのビタミンも含んでいます。(成長要素、酵素群、まだ効力の知られていない10種のホルモンも含まれる。)

未熟児を生んだ母親の母乳は普通の母乳とは異なります。未熟児の母の母乳は未熟児が必要とする特殊な栄養分を満たす働きをします。未熟児の出生後の数週間の母乳は普通の母乳よりもタンパク質の量が比較的多く含まれています。未熟児は毎日、普通に生まれてきた赤ちゃんの2倍にあたる体重1キログラムにつき2グラムのタンパク質を必要とします。また、体重不足の赤ちゃんを生んだ母親の母乳のタンパク質の質(カゼイン/乳漿比率)は調節され30%のカゼインと70%の乳漿タンパク質からなっています。母乳の中の脂肪は体重不足の赤ちゃんのための理想的な総カロリーの50%を提供します。またこの脂肪の消化と吸収、脂肪酸の種類、これら脂肪酸のトリグリセリド分子上の分配は完璧です。

母乳を与えられた未熟児の視覚はより発達していることは良く知られています。脂肪酸、カロチン、タウリン、ビタミンEが母乳中に完璧な割合で含まれることで視覚能力の発達に関する大切な役割を担っているのです。

授乳と生まれてからの2年間

1リットルの母乳だけで、赤ちゃんが2才まで必要とする全てのタンパク質とビタミンAの三分の二を供給することができます。赤ちゃんが毎日1.5リットルの母乳を飲めれば、赤ちゃんが必要とする大部分の栄養を得ることになります。このことから、母乳養育は2才の終わりまで続けることが好ましいとされています。

母乳の本当の価値が発見されたのはつい最近の事でした。1960年代、母乳に不足していてミルクには含まれているひとつの要素が発見されたとき大規模な広告キャンペーンが行われました。これは主にアメリカのテレビで放送され、母親たちはこぞって授乳をやめミルクに切り替えました。これもテレビという「科学」の発達のお陰でしょうか？

1980年に母乳は最初の4ヵ月だけ勧められました。4ヵ月以降は母乳が少しの栄養価もなく、赤ちゃんにとっては水と同じだと主張されました。1986年には、母乳は6ヵ月までが良いとされました。そし

て1993年には、母乳が2年目に入っても子供に必要な栄養の大部分を含んでいることがわかり、母乳は2年間与えるのが良いとされました。

クルアーンには「母親は、乳児に満2年間授乳する。これは授乳を全うしようと望む者の期間である。父親はかれらの食料や衣服の経費を、公正に負担しなければならない。しかし誰も、その能力以上の負担を強いられない。母親はその子のために不当に強いられることなく、父親もその子のために不当に強いられてはならない。また相続人もそれと同様である。また兩人が話し合いで合意の上、離乳を決めても、かれら兩人に罪はない。またあなたがたは乳児を乳母に託すよう決定しても、約束したものを公正に支給するならば、あなたがたに罪はない。アッラーを畏れなさい。アッラーは、あなたがたの行いを御存知であられることを知れ。」(バカラ章2：233)とあります。

医学研究はちょうどここ10年ほど前から母乳養育は2年間続けたほうが良いという結論を出しましたが、クルアーンは14世紀にも渡って同じアドバイスを与えてきました。合理的に考えると7世紀の限られた医学ではどうい発見できるはずのない事実を提供できたのはアッラー以外おられないと思いませんか？





「どうして寛容であるはずなのに、神は料理に使う酒さえ禁止している事を預言者は伝えているの？」友人から食事に招かれた時、私が食べられるものとそうでないものを説明した時に、友人が疑問に思い私に尋ねた質問です。

日本料理ではよく日本酒を使います。私の実家にも家族の誰もお酒を飲まないけれど、戸棚には料理酒が置いてあります。日本ではお酒は他の調味料のように気軽に使っています。友人の質問に対して私は、人間は弱い存在である事や、もし酒を食する事が許されれば制限を越えることもあり得るという事を説明しました。友人は納得したかどうか分かりませんが、とにかく酔わない程度の酒が食せないという事に疑問を感じたようでした。

料理に使う酒に関しては人それぞれ解釈が異なると思います。アルコールは火を通すことでとんでしまうので構わないとする考えや、やはり酒を料理に使うことは避けるべきであるという考えなどがあると思います。

友人の質問に対して、人間の弱さや人間の制限の無さを説明しましたが、人間は自分自身ですべてコントロールできる存在であると強く信じている人は、私がした説明に納得しないと思います。理性があるのだから自分くらいコントロールできると強く思う人も多いかと思います。私も人間が弱い存在であるという表現にかつて疑問を感じていたので、その思いも分かります。自分の強い意志があれば、何を禁じられる事がなくともうまく生活が送れると思っていました。

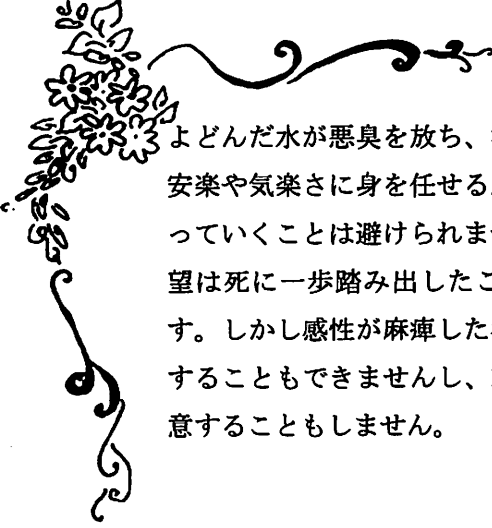
また別の知り合いに、私達は男女の手が触れ合う事も避けるという、「そんなに厳しいの？」ととても驚いた様子でした。この時も私は人間の弱さや制限の無さについて説明しましたが、やはり厳しいなという印象は変わらなかった様子でした。

私は人間がそれほど強いものとは思っていません。強いものならば、酔って事故を起こす人も一切いないだろうし、わいせつな行為で捕まる教師も存在しないでしょう。イスラームで飲酒を禁じていても酒に酔って暴れるムスリムがいるのだから人間は決して強いものであるとは思えません。理想では人間は理性で自分をコントロールできると思っていますが、現実には何が正しいか、間違えたことかもよく分からなくなる状態もあります。

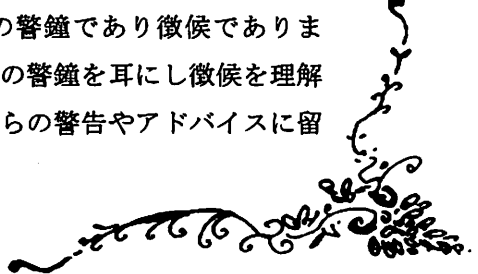
だから人間は学校においても、法律においても、社会においてもたくさんの規則を作る必要があったのだと思います。それほど人間とは弱い存在なのでしょう。

ラマダンには食事制限がもうけられ、ムスリムは夜明けから日没まで一切の飲食を絶ちます。その際に私はより人間の弱さを感じます。食事をしないとなぜか気持ちが引き締まります。経験すると分かると思いますが、断食の最初は食事のことばかり考えるのですが、そのうちくだらない事を考えなくなり、神経が研ぎ澄まされていくようなそんな感じがしてきます。空腹の時のお祈りも普段とは違ってきます。

ラマダン中はいつもよりも気持ちがこもっているような気がします。今年もラマダン中に人間の弱さをもっと感じたいと思います。そうするとエゴの塊の自分や、威張った自分が姿を消し、謙虚な自分が現れてくるからです。そんな自分を発見することはとても大切だと思います。



よどんだ水が悪臭を放ち、流動性を失って腐敗するように、安楽や気楽さに身を任せる怠惰な人々も、墮落し敗北者となっていくことは避けられません。安楽さに浸りたいという欲望は死に一步踏み出したことへの警鐘であり徴候であります。しかし感性が麻痺した者はその警鐘を耳にし徴候を理解することもできませんし、友人からの警告やアドバイスに留意することもしません。





『顔のない天使』The Man Without a Face

こんな暑い最中に言うのもなんですが、そろそろ今年もラマダーン月が近づいてきました。ラマダーンは色々な人と出会う機会が多いです。ああ、今年も色々なところで色々な人と会ったなあ、今まで「ラマダーン」つながりで出会った人の顔などを思い浮かべてみますと、なんだか「日本人」ではない人が多い気がします。更に、話は少しさかのぼるのですが、先月は友人の結婚式だ、婚約パーティだと、色々なイベントが盛りだくさんでした。しかも、たまたまそのほとんどが外国人の友人がらみでした。彼らとの関係をふと考えてみたとき、ある事に気づきました。その気づいた事は、今回の映画を紹介した後でお話します。

高級避暑地にバカンスにやってきたノースタッド家の子供三人は、全員父親が違う。姉と妹に挟まれた12歳の少年チャックの夢は、名門士官学校に入る事。家族から孤立している彼は、顔半分にひどいやけどを負った元教師、マクラウドと出会う。マクラウドは人付き合いをほとんどせず大きな犬と共に静かに暮らしているが、それゆえ地元の人々は彼を不審がると共に顔の傷を笑いのネタとしていた。

そんなマクラウドにチャックは士官学校試験のための個人教師をしてほしいと頼み込むが、断られる。なかなか諦めないチャックに対して、マクラウドも少しずつ教える喜びを取り戻す。いつしか友人となった二人だったが、ある事件が起き、周囲は二人を引き離してしまうのであった……。

この話、母親が次々に父親を変え、そのたびに出来た異父姉妹と暮らす士官学校志望の少年というのが主人公で、「おお、アメリカっばいですなあ」というのが最初の印象です。お母さんはまた新たな父親候補を連れてくるし、気性が激しく被害妄想のあるお姉ちゃんはボーイフレンドといちゃつくし、下の妹は賢く口うるさい。なにもかもがうっとおしくて、どんな話になるんだろうと思っていたら、主人公の孤立した少年が人と距離をおいて暮らす厳しくも優しい元教師との心の繋がりをはぐくむ、という結構リアルでイイ話でした。

しかーし……アメリカ社会はそれで納得して終わらず、元教師に対する偏見から二人の仲をキツチリと裂いてしまいます。周りの人達の態度がすごく腹立たしいし、それに従わざるを得ない二人というのにもとにかくイライラします。でも最後になると、やっぱり二人はしっかり心が繋がってるんだなあ、というのがわかって、スッキリします。ちょっと重い話なので、何度も見るような話ではないけれども、メル・ギブソンらしい「善い」話であったように思います。

さて、今回の導入部とこの映画のつながりは、映画の途中、お互いがわかりあってきた時にチャックがマクラウドの焼けただれた半面を見て言った台詞です。彼はマクラウドのただれた顔を見て、「もう僕にはそのやけどは見えない(=人そのものとして見ているから)」といいます。これが、私と外国人の友人たちの関係をあれこれ考えていたときにふっと思い出されました。

言葉の状況や深みは全く違うものなのですが、私が言いたいことと、意味する事は似ているような気がします。と、いうのは、ある人との間に異質な物事があつた際に、「あの人はこういう人だから」とラベリングして付き合うのは簡単です。でも、その異質な部分が見えないようになったというのはそういった付き合いを超えたところに関係が行つたということで、これはなかなか難しいことではないかと思ひます。

今回はその「異質な部分」が、「国の違い」でした。私にとって、友人たちがまず「人」であつて、「どこそこの国の人である」ということそれ自体がどうでもいいことになっているような気がしました。他の人に何かを説明するときには何ジンですというのはもちろん言うでしょう。でも、自分の中ではその属性はどうでもいい事になっている。それに気づき、そのような関係をもてたこと、そんなふうになつたことを思へたこと、思へるようになつたことを考え、本当に嬉しくなりました。

もちろん、日本人同士でも異質な部分がありますし、例え同じ属性にあるからといって簡単に分かり合えるものでもありません。そのような状況でも、ちょこちょこ「越境」してくれる人もいて、それを普段はなかなか気づくことが出来ませんが、やはりありがたいものです。

この映画では、チャックとマクラウドの絆はずっと後まで保たれる事となります。私も友人たちとのこの関係を、永く保っていければいいと思ひます。皆さんも、人との行き来が増えるラマダーン月を前に、友人たちとの関係をあれこれと考へてみてはいかがでしょうか。

『顔のない男』 1993 アメリカ 115分

監督:メル・ギブソン

原作:イザベラ・ホランド

出演:メル・ギブソン(マクラウド) / ニック・スタール(チャック) ほか





なんとなろう

貴方をにあいまみえる熱愛者たちにとって、あなたいがいの美しさがなんとなろう、

貴方を友とする忠実なる者にとって、あなたいがいにまみえることがなんとなろう、

あなたのお声を拝聴する者たちにとって、あなたいがいの吐息をなんとしよう

心ある者にとってあなたは王、あなた以外の支配者をなんとしよう、

くちびるにはあまいあまいシエルベットのかがおりが、あなたをズィクルする者たちにはそよぎ、

もしあなたの愛を味あうのなら、カイマクや蜂はちみつがなんとなろう、

心があなたを敬愛するなら、あなたの御命に急ぎまいるなら、

あなたにたどり着きそれでもう十分なら、完全なる力強さなどなんとしよう、

貧しき者たちはあなたと共に富めるものとなり、あなたは弱き者たちの唯一のよりどころ、

慈しみと共にあなたを想う者たちにとって、くるしみ、悲しみがなんであろう、

。



ラマダーン月と、規律のある人*

質問：私たちが規律のある人間となる上で、ラマダーン月はどのような影響を与えてくれるでしょうか。聖なるラマダーン月において、どのような習慣を身につけるべきでしょうか。

答え：規律とは、ここでは、秩序が保たれる為に守られなければならない規則や禁止事項、均衡のとれた人間であるために必要な知的、道徳的、精神的鍛錬、そして均衡のとれた精神、というような意味を持つ。

そもそも、信者の生き方は常に、規律正しいものであるべきである。いつ何を行なうべきか、何に時間を費やすべきか、どのような事を行なわなければならないか、前もって認識し、それに応じて振舞わなければならない。どの仕事をまず行なうか決めたり、計画に従って仕事を進めていく意志の他に、「今何をやったらいいんだろう。」といった形の考えを生じさせるべきではない。アッラーに対するしもべとしての義務、他の人たちに関わる責任、自分の個人的な仕事、そしてこれらのうちどれをいつやるのか、ということ、必ず前もって決めておかなければいけない。あらゆる状態において均衡と調和の例を示していなければならない。

本来、イバーダは、仕事の調整や時間の分配のための重要な道標である。信仰する人々はしばしば、やるべき仕事をイバーダの時間によって調整する。「正午の礼拝の後で」「日没の礼拝の前に」と言った形で、一日をいくつかの時間帯に区別し、どの瞬間も無駄に過ごさないようにする。

時の貴重さを知り、生きる時間を、最大限有効に活用すべき大切な恵みであると見なす人たちは、飲み食い、寝起きに至るまで、全てを規律正しく行なう。どのようなことであれ、ごちゃごちゃにしたり、遅らせたりすることはない。人々であれ、組織であれ、最も効率のよい時というのは、最も規律がとれている時である、ということ、彼らは知っているのだ。

ラマダーン月は、食べること、飲むこと、眠ること、といったような人の我欲が求める事柄に対し、行動を定め、これらを必要性に応じる形で、感謝の気持ちを持って行なう形で、生活に規律を与えることを教える。自我からもたらされる欲求に対し、心と魂のもたらす状態へ難を避け、良心を呼び覚まし、意志を強くし、常に正しい方向性を持っていられるよう、教えるのである。

聖なるラマダーンは、人の最も弱い部分の1つである、食べる、飲むという欲求に限度を定め、コントロールできる状態にすることを助ける。まさに、食生活の規律をただすのである。人はその生を継続

*昔々ユーフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがおりました。壊れたつぼで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がおりました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったのですが、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。(HPからの転載)

させる為には、必ず食べ、飲む必要がある。しかし、健康のことを考えに入れることなく食べたり飲んだりしたものは、人の体に害を及ぼす。同様に胃が、心を押しつぶすほどに力をつけ、精神的生のあり方を動物や物質の段階におとしめることも、1つの悲惨な出来事となる。そう、時間を気にすることなくいつでも何かを食べたり飲んだりしていること、いつでもおなかをいっぱいにしていることは、体に害をもたらすだけでなく、アッラーが好まれない振舞いでもある。

この聖なる月を通して行なわれる断食は、食事の時間を定め、浪費や、がつがつ食べ過ぎることを防ぎ、肉体にも精神にも害を及ぼすものから遠ざかり、同時に、確実にハラールの範疇を守り、ハラームには決して手を伸ばさないということにも慣らしていく。ラマダーン月を掟に従って生きる人たちに、こういった観点から規律のある精神を獲得させる。

ラマダーンは、そこから何かを得ることができる全ての人を、それぞれの段階に応じた形で、忠実な勇士とする。断食を行い、そこに秘められたものを理解しようと努める信者は、アッラーに対する方向性や人々に対する結びつきにおいて、いつでも誠実で忠誠を尽くそうとする。その人は、単に決められた時間にイバーダを行なうだけでは十分とせず、しもべとしての服従という境地に達し、全ての時間をしもべとしての意識のうちに活用するようになる。全ての瞬間にイバーダを行なっているかのように生きる。この世的なものへの傾斜や物質的なものへの偏重から少し身を引くことにより、自らをアッラーに捧げ、真実を伝える勇士になるという目的が、彼の前で明らかになってくる。この目標に到達するために、ベディウヅマン師の言葉を借りるなら、「アッラーゆえに思い、アッラーゆえに話し、アッラーゆえに愛情をいやく」という状態であるようになり、常にアッラーの御前へ向き合おうとしてみる。この挑戦の結果、日々少しずつ、その到達点に近づいていく。そして完全な誠実さ、忠実さを持つ人となっていく。そもそも断食は、忠誠を示す最良のしるしである。なぜならそれは、アッラーとそのしもべの間で結ばれた契約であるからだ。しもべは、定められた時間、定められたものを放棄する。そして忠誠を示すのである。アッラーも、その報奨をご自身が与えられるであろう、ということに約束される。アッラーに対し忠誠さを持って振舞う人は、次第に、家庭生活、社会生活においても、完全な誠実さを持つようになる。この思いで、家族、親戚の結びつきに気を配る。皆に援助の手を伸ばす。ザカートを支払うことを決して怠らず、さらにはサダカを支払い、扶養のお金を出すことにおいても、決して十分だと見なすことがない。

アッラーとの結びつきにおける重要なしるしは、クルアーンを読むこと、ドゥアーをしてアッラーに乞い願うこと、そしていつでもアッラーの方に向いていることである。クルアーンを刺繍のついた箱や絹のカバーの間に閉じ込めることをやめ、それを舌と心へ素敵な味わいを与えるものとする 것도、残念なことにも多くの人々にとってはある意味ラマダーン月にのみ、可能となる。この聖なる月は、クルアーンを味わせ、人々にドゥアーや祈念、ズィクルの規律正しさを植えつける。

一ヶ月を通して、食べること、飲むこと、寝ること、起きること、イバーダを行なうこと、服従すること、祈念すること、ズィクルすることといった、人の生の多くの場面に関わってくる規則、定められたことの範疇で行動し、一定の規律を持つ魂に出会い、規律正しく生きることになれた人は、ラマダーン月が終わった後も同じ規律、秩序を守り、継続させなければならない。例えば、一ヶ月、毎晩眠りを中断し、断食前の食事の恵みを得る為に努力し、礼拝用の絨毯の上で時を過ごした信者は、この30の夜を慣

2006年8月 やすらぎ

らしの為の期間として活用し、一年を通して全ての夜を同様に過ごし、少なくとも数ラカートのタハーजूドの礼拝で、夜を照らさなければならない。

そう、規律を持った人は、どのように生きるか、どこでどう振舞うべきかということをもっつきりさせている。一定の原則に基づいて航路を描き、全ての歩みを意識して進める。私たちの振舞い、行動の色、デザイン、デッサンを、私たちの教えは前もって定めている。例えば、アッラーとその使徒を信じることは私たちにとって最も大切な基本である。この基本は、その後の歩みの方向をも定める、信号のようなものである。私たちは、私たちが信じる主と、導き者としているアッラーの使徒を皆に説明する責任を負っている。この教えを広めることは私たちの役目である。だから私達は人々の心をつかみ、この上なくすばらしいイスラームの美を示す為、それを立派に体現できるよう、努める。この意志により、私たちの教えの源が定めている振舞い、行動と共に、人々の中にいる。私達の価値を示す。心から尊いと思っている真実を皆に伝える為、禁止されていることを行なわないという前提のもと、その実行が承認されているあらゆる手段を尽くす。そしてできる限りのことをして、人と信仰の真実との間を妨げているものを取り除こうと努める。同時に、規律のある人と、規則のみを重視する人との間の違いにも留意している。自分が生きている時代の条件にも重きを置き、自分の文化のあり方の現実にも目を向け、その時代を生きる人達が理解できるような言葉、手段を用いて呼びかける、といったような点にも注意を払う。

もし、私達自身をアッラーのご満悦に捧げ、またそのご満悦を、伝えることに結びつけるのであれば、私達はどこにしようとも、どのような条件下にあらうとも、もはや立ち止まったり、力を失ったり、責任から逃げ出したり、ということはありません。なぜなら、「春が来て、暖かくなって、花が咲いて、鳥が鳴いて、そうしたら私も歌おう。」というような考え方は、規律を持った人の思考ではありえないからである。彼は冬であらうと、夏であらうと、春であらうと、秋であらうとバラに歌いかける人でなくてはならない。それぞれの季節、それぞれの時期にあった言葉と手段を選び、尊い真実を優しく語り続けなければならない。

もちろん、こういった心の崇高さや、これほどに規律正しい魂は、特別な恵みがなければ、短時間で獲得できるものではない。その境地に達することは長い時間と、かなりの鍛錬を必要とする。ラマダーンは最初の第一歩となるのであり、そういった性質を身につける為の恵み多い種まきの季節である。

そもそも、信仰する人にとって、人の生きる時間はラマダーン月のようであり、成年期は断食開始の時間、死は断食明けの食事の時間である。一ヶ月のラマダーンは、生涯続くしもべとしての齋戒への練習のようである。30日間で獲得したすばらしい性質を一生維持することができる人は、ここで少々空腹やどの渴きを味わう代わりに、あの世において「わがしもべたちよ。あなた方はしばしば、顔色が悪かったり、目が落ち窪んでいたりしていた。私の為にこれらに耐えていた。過ぎ去ったあの日々のかわりに、今こそ食べなさい。飲みなさい。」という呼びかけを聞くだろう。そしてその日、真の「断食明けの食事」をとるだろう。



最近、出身中学校へ行く機会がありました。恩師と10年ぶりに話をしました。働きながら大学院に通っている、結婚した、ということより何より、ムスリムになったことは恩師にとって、相当な変化だったのでしょう、その関連の質問がたくさん出ました。その中の一つに、「どうしてスカーフを着けているのか？」というものがありました。

自分に、その理由を問いかけてみました。もうずいぶんと、そんなことを考えたこと自体が無かったのです。以前の私だったら、例えば、5年前の私だったら、「女性として自分の心身を守り…」云々と、つらつら理由を説明したと思います。ところが、その時は、自分の心に問うてみても問うてみても、そんな答えは浮かんできません。私が言った言葉は、自分にとってみても、至極思いがけないものでした。

「神さまがそう言われているから…」

どうして自分にとって、この理由が意外だったかという、以前の私は、この説明があまり適切ではないと考えてきたからです。「どうしてスカーフを着けているのか？」という質問は、ほぼ、ムスリムでない人から来るはずで、ムスリムでない人に、というか、イスラームの教えについてあまり知らない人（ムスリムであるからと言ってよく知っているとも限らないですが…）に対して、「アッラーがそう言われているからです。」ときっぱり！言うのは、あまりに不親切ではないかと、そう思っていたのです。もし私が質問した側だったら、そんな答えでは絶対に納得しない、と考えたのです。

しかし、いま、落ち着いて考えてみると、何が不親切で何が不親切でないかは、そうそう分かるものでもないと思えてきました。納得しない人は、多分、「心身を守り」云々でも、納得しない。何に納得しないのかと言うと、その理由そのものではなく、言ってみればその理由を「のんだ」理由の方でしょう。つまり、「信仰」もしくは「信仰心」そのものだと思うのです。

信仰というものは、説明することが難しいものだと私は感じています。だけど、「伝えてよ！」と訊かれているので、伝えるしかない。伝えたい。そのためにはどうすれば良いのか。そこで、「アッラーがそう言われているから…」が出てくるのです。

それは、

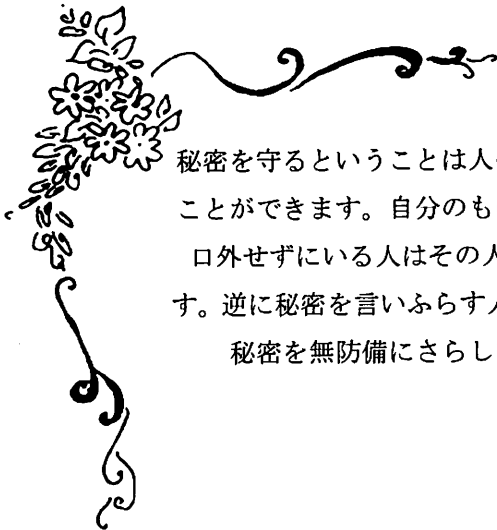
「お母さんがダメって言ったから…」

「じゃああんたは、お母さんが死ねって言ったら死ぬんか?!」

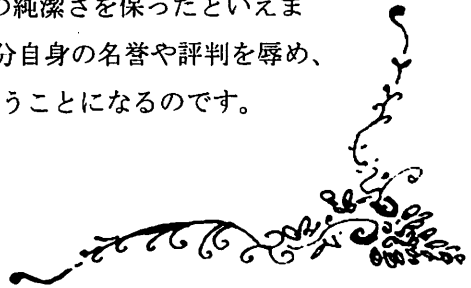
という、よくある言い争いにおける、「〇〇が言ったから」式の意味合いとは全く違います。よくある言い争いにおけるそれは、端的に言えば責任の押し付けです。僕が悪いんじゃない、僕が決めたんじゃない、僕の意志でやったんじゃない。責任転嫁、責任放棄です。

一方、「神さまがそう言われているから」という時の意図というのは、「つまりは信仰なんです」ということを、何とか伝えようとして、ストレートになった形だと思います。先に述べた意味との対比を強調した形で表現すれば、自分が信じていることであり、自分で考えた結果であり、自分の意志であり、責任というちょっと語弊があるかも知れませんが、行動の主体は自己である、ということです。ただ、こういう表現はあくまで対比であって、「自分が自分が！」という感覚とはまた全然違うのですが…

「神さまがそう言われているから…」 どうしてもそれしか出てこなかったのが、恩師にはそのひとことだけを言いました。意外にも先生は、馬鹿にした様子も、意味が分からないという様子も見せず、逆にどこか、痛いところをつかれたような、新鮮な驚きに見舞われたような表情をされていました。あれからずっと、私も考えています。



秘密を守るということは人の高潔さを守ることになぞらえることができます。自分のものであれ他人のものであれ秘密を口外せずにいる人はその人自身の純潔さを保ったといえます。逆に秘密を言いふらす人は自分自身の名誉や評判を辱め、秘密を無防備にさらしてしまうことになるのです。



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三菱東京UFJ銀行 店番号：630（春日部）口座番号：1134374 口座名義：月刊誌やすらぎ
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部